

特集「情報システム学の研究課題と方法」の編集にあたって

浦 昭 二†

情報システムとは、情報の蓄積、処理、伝達の仕組みの総体である。そこには、コンピュータやデータ通信の技術によって構築される仕組みはもとより、企業体あるいは人間社会に蓄積された様々な規則や「しきたり」、データや情報なども含まれる。この情報システム(IS)に目標を与えるのは、それが置かれる「場」(社会あるいは組織体)、またそれを用いる「人」である。一方、ISもまた、「場」や「人」に影響を与える。

これからのISは、社会基盤レベル、組織体レベル、そして個人レベルと3段階に分けて考えるのが適切であると思われる。しかし、そのいずれのレベルにおいても、ISをデザインするには、従来の工業製品の設計や評価の考え方だけではすまされない。これまで人文・社会科学の領域とされてきた問題認識や研究方法をも取り入れたデザインのあり方を確立していかなければならない。これには情報そのもの、および人間行動と情報との関連への洞察が欠かせない。したがって、ISをたんにコンピュータの応用システムとして捉えるのでは不十分である。

今後、情報社会はますます拡大し、また深化していくものと思われる。それを堅実なものにするためには、コンピュータやデータ通信の技術そのものの高度化をはかるコンピュータ科学、複雑かつ大規模なソフトウェア構築を指向するソフトウェア工学が必要であることはいうまでもない。しかし、それだけで事足りるわけではない。資源としてどんな情報をいかに蓄積し、また流通させたらいいかを考える必要があるし、また上述の意味の情報システムを企画・実現・運用する基盤を与えるための体系をまとめていかなければならない。

‘情報システム学 (Information Systems)’は、このような要請に基づいて誕生した実学であり、そこには、人間・組織・社会に対する理解と問題解決の科学がある。IFIPのTC8やICIS (International Conference on Information Systems) ではこの観点からの研究が以前から積み

重ねられてきているし、またICISの参加者を母体として、新しくAIS (Association for Information Systems) が昨年末に発足した。

今回の特集では、情報システム学の持ついくつかの側面の中から、6つのテーマをとりあげた。(1)では、‘情報システム学’という学問領域全般について、簡潔に述べている。(2)では、これまで当然のこととしてシステム開発の上流工程に位置づけられてきた「要求分析」をめぐって、主として英国の文献を中心としながら、現在起こりつつある批判について概説している。(3)では、情報システム学研究において1つの核を構成する、経営情報システム論 (Management Information Systems) の立場からISを分類し、各レベルごとに問題点の分析を行っている。(4)では、これまで様々な形で議論されてきた「情報システムの評価」の問題に焦点を当て、システムの持つ定性的効果やユーザの視点にも配慮しながら、経済性評価の枠組み、現状と問題点、研究方法について論じている。(5)では、研究者自らが積極的に問題解決に参画する研究アプローチであるアクションリサーチのIS研究への利用、およびそこで用いられる1つの技法であるソフトシステム方法論について解説している。(6)では、近年、社会学において脚光をあびつつあるGiddensの構造化理論 (Structuration Theory) と、その情報システム学への応用について論じている。

以上に取りあげたテーマは、情報システム学のいわば断片を示したものである。まだ究極の目標とする情報システム学を体系立てて提示するにはいたっていない。それを実現するためには、現に情報システムの企画・開発・運用に携わっている専門家の方々が、自ら進んで情報システム学の構築に参画していただくことが不可欠である。また、人文・社会科学の研究者が、自らの研究テーマとして、情報システムをめぐる様々な問題に積極的に取り組まれることを切望するものである。

(平成7年9月11日)

† 新潟国際情報大学情報文化学部